
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ
(例) 五月雨《さみだれ》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号
(例) 末|縫《もつ》れて

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定
(数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと行数)
(例) [# 「木+霊」、第3水準1-86-29] 子《れんじ》

時節は五月雨《さみだれ》のまだ思切《おもいきり》悪く昨夕《ゆうべ》より小止《おやみ》なく降りて、
[# 「木+霊」、第3水準1-86-29] 子《れんじ》の下《もと》に四足踏伸ばしたる猫《ねこ》懶《ものう》くして起《た》たんともせず、夜更《よふけ》て酔はされし酒に、明《あけ》近くからぐつつり眠り、朝飯《あさめし》と午餉《ひるめし》とを一つに片付けたる兼吉《かねきち》が、浴衣《ゆかた》脱捨てて引つ掛くる衣は紺《こん》にあめ入の明石《あかし》、唐繻子《とうじゅす》の丸帯うるささうに締《し》め畢《おわ》り、何処《どこ》かけんのある顔の眉《まゆ》蹙《しか》めて、四分珠《しぶだま》の金釵《きんかん》もて結髪《むすびがみ》の頭をやけに掻き、それもこれも私がいつもののんきで、気が付かずにみたからの事、人を恨むには当りませぬと、長火鉢《ながひばち》の前に煙草《タバコ》喫《の》みゐるお上《かみ》に暇乞《いとまごい》して帰らんとする、代地に名うての待合《まちあい》朝倉《あさくら》の戸口を開けて、つと入り来るは四十近いでつぶり太つた男、白の縞上布《しまじょうふ》の帷子《かたびら》の襟《えり》寛《くつろ》げて、寄道《よりみち》したお蔭にこの悪い道を歩かせられしため暑さも一入《ひとしお》なり、悪いといへば兼吉つあんの顔色の悪さ、一通りの事ではなさうなり、今から帰るでもあるまじ、不肖《ふしょう》して己《おれ》に付き合ひ喫み直してはと遠慮なき勸《すすめ》に、お上《かみ》が指図して案内《あない》さするは二階の六畳、三谷《さんや》さんなればと返事待つまでもなくお万《まん》に口を掛け、暫《しばら》くは差向《さしむかい》にて、聞けば塞《ふさ》ぐも無理ならず、昨夕は御存じの親方呼びに遣《や》りしに、詰らぬ行掛りの末|縫《もつ》れて、何《なに》、人《ひと》を、そんなつひ通《とおり》の分疏《いいわけ》を聞くあたいだと思ひか、帰るならお帰りと心強いなせしに、一座では口もろくに利《き》かぬあの喰《くわ》せもののお徳《とく》め、途《みち》で待ち受けて連《つ》れ往《ゆ》きしを今朝聞いた悔《く》やしさ、親方の意気地《いくじ》なしは今始まつたではなけれど、私の気にもなつて見て下され、未練ではござりませぬ、唯《た》だ業《ごう》が沸《に》えてなりませぬ、親方の帰つた迹《あと》ではいつもの柳連《やなぎれん》の二人が来てみたこととて、附景気《つけげいき》で面白さうに騒がれるだけ騒ぎ、毒と知りながら、麦酒《ビール》に酒|雑《ま》ぜてのぐい喫《のみ》、いまだに頭痛がしてなりませぬとの事なり、兼吉がこの話の内、半熟の卵に焼塩添へて女の持ち運びし杯盤《はいばん》は、幾らか気色を直し肝癪《かんしゃく》を和《やわら》ぐる媒《なかなだち》となり、失せた血色の目の縁《ふち》に上《のぼ》る頃、お万が客は口軽く、未練がないとはさすがは兼吉つあんだ、好く言つた、相手が相手ゆゑお前に実《じつ》がないとこの三谷が誰にも言はせぬ、さういふ時の第一の薬は何でもしたい事をして遊ぶに限る、あれならといふ人はないか、おれには差当り心当はなけれど、中屋《なかや》の松《まっ》つあんななどはどうだらうといへば、兼吉は寂《さび》しくほほと笑ひ、あんまり未練がなさ過ぎるか知れませぬと、腹にあるだけ言つてしまひたいのは私の癖《くせ》、中屋とまでいはれては黙つてはゐられませぬ、松つあんならぬ弟の清《せい》さん、浮気らしいがあの人なら一日でも遊んで見たいと兼て思つてをりました、なるほどさうありさうな事ではあれど、弟の方にはしかもお前の友達の小花《こはな》といふ色があるではないか、頼まれもせぬにおれから言ひ出し、今更ら理窟をいふではなけれど、噂《うわさ》に聞けば小花と清二《せいじ》とは、商売用で荻江《おぎえ》の内へ行き始めし比《ころ》、いつとなく出来た仲だとやら、その上《うえ》松《まっ》つあんよりは捌《さば》けてゐるやうでも、あの生真面目《きまじめ》さ加減では覺束《おぼつか》ない、どうやら常談《じょうだん》らしくもないお前の返詞《へんじ》がおれの腹に落ち兼ねる、お前は本当に清さんと呼ばせる気か、はい本当に呼んでおもらひ申す気でございます、小花さんに済まぬとは私にも熟《よ》く分つてをれど、清さんならと思ふも疾《と》うからなれば、さうなる日には小花さんにはかうと思ひ定めてゐるも疾うから、お徳さんなぞのやうにけちなことは私はせぬ、私の心を打ち開けた上で、清さんは何とおいひか知らねど、嫌とならそれまでの事、万に一つも聞いてもらはれたら、それから先は清さんの心次第

、お前の親切に絆《ほど》されて一旦かうはなつたれど、それでは小花に義理が立たぬ、これきり思ひ切れとなら、思ひ切つて小花さんに立派に謝《あやま》る分《ぶん》のこと、清さんに限つて小花さんを私《わたし》に見変へるといふはずはなけれど、さうなれば私は命も何も入《い》りませぬ、それぢや命掛といふのだね、凄《すご》い話になつて来た、己なんぞの目ぢやあ、色の浅黒い瘦《やせ》つぼちの小花より女は遙《はるか》兼ちやんが上だ、清こうは慥《たし》か二十五でお前には一つ二つの弟、可哀《かあい》がられて夢中になつた日には小花には気の毒なれど、呼ぶだけは己が呼ぶ、跡は兼吉つあんの腕次第だと、座を外《はず》してゐた女を呼んで使の事を頼めば、銚子《ちょうし》持つて立出づる廊下の摩《す》れ違《ちが》ひさま、兼吉ねえさんが、ああで聞いてよと入り来るはお万なり、髪は文金《ぶんきん》帷子《かたびら》は御納戸地《おなんどぢ》に大名縞《だいみょうじま》といふ袴《こしらえ》、好《よ》く稼《かせ》ぐとは偽《うそ》か真《まこと》か、肉置《ししおき》善き体ながらどちらかといへば面長《おもなが》の方なるに、杯洗《はいせん》の上に俯《うつむ》いてどつちが円いかしらなどとはどういふ心か、荻江の文子《ふみこ》さんが来て、小竹《こたけ》も梅子《うめこ》も内に遊んでゐましたといふに、そんなら呼べと座は遽《にわか》に賑《にぎや》かになりぬ、三谷が梅子に可哀さうに風を引いてゐるといへば、お万引き取りて、この子の寝ざうといつたらございませぬ、それに幾らねんねでも、先刻《さっき》も文子さんが遊びに来ると、鼻をかまうかしらと相談してと笑ふ、三谷色気がない内が妙だといへば、兼吉がそこ処《どこ》は受け合はれませぬ、竹ちやんが岡惚帳《おかぼれちょう》袴《こしら》へれば、いいえあら嫌なつてつたつて話すわ、梅ちやんも人真似をして、ためになるお客の上には大の字、気に入つたお客の上には上の字が幾つも重ねて附けてあるといふ、三谷 | 己《おれ》の名は上の字が十ばかりあるはずとからかへば、沢山附いてますと笑ふは瘦ぎすの小竹、あら大の字の方だわと正直にいふは厩《えくぼ》の梅子、上の字なんぞ附けてはお万ねえさんに悪いわねえとは、ちびの文子なかなかませたり、下から来た女に堀田原《ほったはら》の使はと問へばまだといふに、追《お》ひ駈《か》けてまた人を遣り、あの豎樋《たてどい》の音に負けぬやうにと、三谷が得意の一中《いっちゅう》始まりて、日の暮るるをも知らざりけり、そもそも堀田原の中屋《なかや》といつば、ここには熟《よ》く知れ渡りたる競呉服《せりごふく》にて、今こそ帝国意匠会社などいふ仰山《ぎょうさん》なモノも出来たれ、凝つた好《このみ》といへばこの中屋に極はまれり、二番息子の清二郎へ朝倉より雨を衝《つ》いての迎《むかえ》に、お客はと尋ねれば三谷さんに兼吉さんがお出《いで》とばかり好く分らず、呼びに遣りし車の来ぬ内再度の使 | 忙《せわ》しければ、ともかくも直《じ》きにと荻江まで附けさせ、お幾婆《いくばあ》さんに何であらうと相談すればここでもわからず、そんな噂はなかりしが兼吉さんが引《ひ》つ籠《こ》むので浴衣の誂《あつらえ》でもあるのか知らぬとのみ、家の娘お浅《あさ》の小花さんが待つてお出《いで》なれば帰にはお寄《より》でせうねといふを後《うしろ》に聞きて、朝倉に来《こ》しは点燈頃《ひともしごろ》なり、こちらは一中を二段まで聞かせられ、夕飯もそのまま済ました処、本人の兼吉のみか、待つ人の来ぬは心落着かぬもの、文子は畳の上に置いた団扇《うちわ》を団扇で打ち、下のが上のに着いて上がるを不思議なことでもあるやうに、厭《あ》きずに繰り返してをれば、梅子は枝豆の甘皮《あまかわ》を酸漿《ほおずき》のやうに袴《こしら》へ、口の所を指尖《ゆびさき》に撮《つま》み、額《ぬか》に当ててぱちぱちと鳴らしてゐる、そこへ下より清さんがお出《いで》ですとの知らせと共に、梯《はしご》を上り来る清二郎が袴は細上布《ほそじょうふ》の帷子《かたびら》、ひんなりとした男振《おとこぶり》にて緹《かすり》の藍《あい》に引つ立つて見ゆる色の白さ、先づ一杯と盃《さかずき》差したる三谷が、七分の酔を帯びたる顔に笑《わらい》を含み、御苦労を願つたは私の用といふでもなく、例の商用といふでもなし、ここにゐる兼吉さんから委細の話は直《じき》にあるはず、一口に申せば何でもない事、ただもう清さん恋しやほうやれほといふやうなわけと、何だか分りにくい言草《いいぐさ》に兼吉気の毒がり、一中も最《も》う沢山、可哀さうに私だつてまだ気が狂ふには間があります、なにね清さん詰まらない事なのよ、そりやあさうと清さん今夜は別に用がないなら緩《ゆっく》り遊んでお出《いで》なさいなと、さすがに極《きま》り悪《わ》るげな処へ、兼ての手筈《てはず》に女の来てちよつとこちらへと案内するは、同じ二階の四畳半に網行燈《あみあんどう》微暗《ほのくら》く、蚊《か》の少き土地とて蚊 [# 「巾+廚」、第4水準2-12-1] 《か》は甲《つ》らねど、布団《ふとん》一つに枕二つ、こりや場所が違ひませうと、清二郎の出ようとするを留《とど》めるは兼吉、胸のみ頻《しき》りに騒がれて、昨夕《ゆうべ》から喫《の》んだ酒の俄《にわか》に頭の上《のぼ》る心地、切角《せっかく》これまで縫《よ》り掛けながら、日頃の願の縁の糸が結ばれようか切れようか、死ぬるか生きるか、極《き》まるは今の束《つか》の間《ま》と思案するもまた束の間、心は [# 「諂のつくり+炎」、第3水準1-87-64] 《ほのお》語《ことば》は氷《こおり》、ほほほほほ出抜《だしぬけ》だから胆《きも》をお潰《つぶ》しだらうね、話せば直《じき》に分る事ゆゑ、まあちよつと下にゐて下されと、枕頭《まくらもと》の烟草盆を間に置いて二人は坐りぬ、姉さんがさう仰《おっし》やるからは定めてわけがございませうが、お迎の時からこの間《ま》に来るまで、何だか知れぬ事だらけで、夢を見るやうな気がしてなりませぬ、一体これはどうした次第と、いひながら取り出すは古代木綿の烟草入、徐《しずか》に一服吸ひ付くるをぞつと見つめて募るは恋、おや清さんの烟管《キセル》も伊勢新なのねえ、ええこれはいひ掛けしが、これは小花と揃《そろい》とは言ひ兼ねてか口籠《くちごも》る愛らしさ、ほんに私《わたし》の好《い》い気な事ねえ、清さんに話をするつてばんやりしてゐてさ、話といふのも本当は大袈裟《おおげさ》な位と、兼吉の言ひ出すを聞けば、この雨の日の退屈まぎれ、三谷さんが兼ちやんも誰か呼んで遊べといひしに、呼ぶ人がないといふ

たら松つあんではどうだとの事、私がつひ松つあんより清さんが好いといったが起《おこり》、小花さんといふもののある清さんの名を指したのがいかにもづうづうしい、どうでも清さんと寝かして困らせて遣《や》と言ひ張り、とうとうここにお前さんを連れ寄せて済みませねど、唯少しの間《ま》横にだけなつてゐて下されば好いといふ、それでは姉《ねえ》さんほんのお茶番なのねえ、三十分もゐたら好《い》いのでせうか、ああ好いどこぢやあなくつてよ、だが皺《しわ》になるといけないからこの浴衣《ゆかた》だけはお着なさいよ、私も着かへるからと扱《しごき》ばかりになれば、清二郎は羽織《はおり》を脱ぎながら私やあ急いで来たせめか、先刻《さっき》から咽《のど》が乾いてなりませぬ、ラムネが貰《もら》へるなら姉さん下へさういつて下されといふ故兼吉すぐに廊下に出て降口《おりぐち》より詠《あつら》へるを、かの六畳からお万が見ゐたり、二人は一間に籠りゐて、ラムネの来《こ》しをば兼吉が取入れつつ、暫しありて清二郎は湯にとて降りて復《ま》た来《きた》らず、雨は夜《よ》の間《ま》に上《あが》りしその翌日《あくるひ》の夕暮、荻江《おぎえ》が家の窓の下に風鈴《ふうりん》と共に黙《だんまり》の小花、文子の口より今朝聞きし座敷の様子 | 訝《いづか》しく、清さんが朝倉の帰に寄らざりしを思ひ合せて、塞《ふさ》ぎながら湯に往《ゆ》きたるに、聞けば胸のみ騒がるお万があゝの詞《ことば》の端々《はしばし》、兼吉さんが扱《しごき》ばかりで廊下に出たのを見たとは真《まこと》か、清さんに限つてはと思ふはやはり私の慾目、先刻お仕舞してゐるとき二階の笑声を何事ぞと問ひしに、お浅さんの立ちながらいはれしは、一足先に兼吉さんが来て、内の文子と遊びに来てゐた梅子とを二階へ連《つれ》て行き、踊を浚《さら》つて遣るとの事とか、私に対して昨日から何事もないかのやうに、その気の軽さがいよいよ憎い、下りて来たならどう言はうか、先《さき》からはまたどう言ふつもりか、所詮 | 内氣《うちき》なこの身には過ぎた相手とつおいつ、思案もまだ極まらぬ時、ばたばたと梯《はしご》降り来し梅子文子は息を切らせて、小花ねえさんに梅子さんの甚五郎《じんごろう》が見せたくつてよ、いいえ文子さんこそ人形のくせに笑つてばかりゐましたといふ後より兼吉も下りて、本当に今日の暑い事ねえと何気なけれど、さうねえといつたきり俯向《うつむ》いて済めぬ顔、文子は急に思ひ出して、さうさう先刻からラムネが冷やしてあつてよ、兼吉ねえさんに上げようやと、何心なく持つて来たるサイフォンの瓶《びん》にコップ三つ四つ、先づ兼吉に注《つ》いで出すを、小花 | 側《そば》よりぢつと見て、ねえさんラムネが好《すき》ねと声震はせじとやうやういふに、大好《だいすき》よと無頓着なる返辞、ええ悔《く》やしいと反《そ》りかへつて正体なし、その夜座敷を断りて臥《ふ》しゐたる小花の許《もと》へ、つひになきこと目と鼻の間に住む兼吉が文届《ふみとど》きぬ、しかもその長々しさは一本の巻紙皆にせしかと思ふばかり、痛む頭を擡《もた》げし小花が虫を押へて拾読《ひろいよみ》するその文に曰《いわ》く、一筆《ひとふで》しめし上参《あげまい》らせ候《そろ》、今は何事をも包まず打ち明けて申上げ候ふ故、憎い兼吉がためと思ふ可哀い清さんのためと御読分《およみわけ》下されたく候、申すも御恥かしき事ながら、お前様といふもののある清さんに年上なる身をも恥ぢず思を掛け、出来ぬこと済めぬことと堪《こら》へれば堪へるほど夢現《ゆめうつつ》の境も弁《わきま》へず焦《こが》れ候ふはいかなる因果《いんが》か、これは久しき前よりの事に候へども、御存じの通の私が身持、昨日《きのう》は誰 | 今日《きょう》は誰と浮名《うきな》の立つを何とも思はず、つひこの頃までも親方と私との中は知らぬ人なき位に候ふ事とて、お前様にも清さんにも覚《さと》られ候こともなく打ち過ぎ候ふに、昨日 | 三谷《さんや》さんのお座敷にて、ふとした常談に枝葉《えだは》がさき、清さんと呼んで下され、呼んで遣らうといはれた時の嬉しさいかばかりぞ、これのみは御自分の身に引《ひ》き比《くら》べお察し下されたく候、さて床の展《の》べあり候 | 間《ま》に清さんと這入《はい》り候時の私の心は、ただただ夢の如くにて自分にもかうかうとはつきり分りをらず候へども搔《か》い撮《つま》んで申し候へば、まことにまことに卑しく汚《けがら》はしく筆に書き候も恥かしき次第、お前様といふもののある清さんとこのやうな身持の私が、すなほに彼此《かれこれ》申し候とも願の [# 「りっしんべん + (匚 < 夾) 」、第3水準1-84-56] 《かな》ふはずなければ、何事も三谷さんの酒の上から出た戯《たわぶれ》のやうに取成《とりな》し、一しよにさへ寝たならば、なんぼ実があるとして、まだ年若な清さん、私はこんなお多福《たふく》でも側にゐられて気持の悪くなるほどの女でもある間敷《まじく》、つひ手が障《さわ》り足が障るといふやうな事になれば、その上で言ひたい事をも申すべしと存じ候《そうら》ひしには違《ちがひ》なく、かやうな悪しき心を持ち候ひし事、今更申すも恥しく候、さて女の性《しょう》は悪しきものと我ながら驚き候は、大人《おとな》しく横になつてゐた清さんの領《えり》へ私が手を遣《や》りし事に候、その時に清さんは身を縮めてぶるぶると震ひなされ候、女の肌知らぬ人といふではなし、可笑《おか》しな事申すやうではあれど色々男と寝たことある私、つひにない事、はつと思つて手を引き候とたん何とも申さうやうのない心持《こころ》致し、それまで燃え立つやうに覚え候ふ胸の直様《すぐさま》水を浴《あび》せられ候ふやうになり、ふつつりと思ひ切つて清さんにはその手をさへ常談の体《てい》に申しくろめ、三谷さんの手前湯にといはせて返し候へば、清さんは何ともお思ひなさるまじく飛んだ隙潰《ひまつぶ》しをしたなどと申しをられ候ふ事と存じ候、この始末後にて考へ候ふに、私に罰《ばち》でも当つたのかお前様の念《おもひ》が通つてゐたのか、拙《つたな》き心には何とも弁《わきま》へがたく候、この文差上げ候ふ私の心お前様に熟《よ》く分り候はんや覚束《おぼつか》なく候へども、先ほど申し候ふ通《とおり》それはどうでも宜《よろ》しく、ただお前様が清さんを大事にしてさへお上げなされ候はば、私の願もその外《ほか》にはござなく候、返す返すも羨《うらや》ましきは清さんのやうな人をお持なされ候ふお前様の身の上にて、たとひどのやうに憂《う》いつらいと思ふ事ありとも、その憂いつらいは頼《たのみ》になる清さんのやうな

優しい人を持たぬものの憂さつらさに比べては何でもない、よくよく御勘弁なさるべく候、また私の事はこの上未練がましく申したくはなく候へども、今までも不身持な女子《おなご》のこの末はどうなり申すべきか、我身で我身が分り申さず、どうして私はかうなつたやら、どうして私はどうなろうか知れぬやら、それはお前様に申しても甲斐《かい》なき事と致し候うて、ここに一つ申し置き候ふは、もし少しにてもこの文の心 | 御解《おわかり》なされ候はば、昨夕罪のない清さんを罪に墮《おと》さなかつたのは兼吉だ、よしや兼吉が心から罪に墮すまいと思つてではないにしても、罪に墮すことの出来ぬやうな何とも知れぬ心に兼吉はなることがあつたといふ事ばかりに候、この後清さんには指もさすまいと思ふ私に候へば、つひ何事もなかつたやうに御附合のほど祈り入り参らせ候かしく、なほなほこの手紙 | 御取棄《おんとりすて》なされ候ふとも、清さんになり誰になりお見せなされ候ふとも宜しく候、小花様へ兼吉よりとはさてさて珍しき一通、何処《どこ》が嬉しくてか小花身に添へて離さず、中屋の家督に松太郎《まつたろう》が直《なお》りし時、得意先多き清二郎は本所辺に別宅《べったく》を設けての通《かよ》ひ勤《づとめ》、何遍《なんべん》言うてもあの女でない女房は生涯持ちませぬとの熱心に、物固い親類さへ折り合ひて、小花を嫁に取引先なる、木綿問屋の三谷が媒《なかだち》したとか、兼吉はまたけふが日まで、河岸《かし》を変へての浮気勤《うわきづとめ》、寝て見ぬ男は誰様の外なしと、書かば大不敬にも坐せられるべきこといひて、馴染《なじみ》ならぬ客には胆《きも》潰《つぶ》させることあれど、芸者といふはかうしたものと鼻屑《ひいき》する人に望まれて、今も歌ふは当初《そのむかし》露友《ろゆう》が未亡人《ごけ》なる荻江《おぎえ》のお幾が、かの朝倉での行違《ゆきちがい》を、老《おい》のすさびに聯《つら》ねたー | 節《ふし》、三下《さんさが》り、雨の日を二度の迎に唯だ往き返り那加屋好《なかやごのみ》の濡浴衣《ぬれゆかた》慥《たし》か模様は染違《そめちがえ》。

底本：「舞姫・うたかたの記 他三篇」岩波文庫、岩波書店

1981（昭和56）年1月16日第1刷発行

1991（平成3）年5月15日第19刷発行

底本の親本：「鷗外全集 第三巻」岩波書店

1972（昭和47）年1月刊

初出：「新小説」

1897（明治30）年8月5日

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2006年3月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。